様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６２３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２３０

研究課題名（和文）地方における狂言の伝承についての研究－馬瀬狂言資料を中心に－

研究課題名（英文）A Study of the handing down of local Kyogen: focusing on Maze-kyogen

研究代表者
山本　晶子（YAMAMOTO, AKIKO）

昭和女子大学・人間文化学部・教授

研究者番号：９０２４５８７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：地方に伝承された狂言資料として、三重県伊勢市の馬瀬狂言資料の調査・分析を行い、江戸後期から現在に至るまでの変遷の実態と芸の伝承方法について明らかにした。
馬瀬狂言の系統が江戸中期から後期にかけての和泉流山脇派の詞章を中心としていたこと、必要に応じて『狂言記』や大蔵流の詞章も活用していたこと、また詞章の簡略化や独自の演出など、中央の流派の単なる継承ではなく、馬瀬狂言独自の工夫がなされていたことを指摘した。更に馬瀬狂言が伊勢という地で伝承された意義についても明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The following represents a summary of research into the Maze-kyogen of Ise. 1. The Maze-kyogen school (Izumi style) is mainly comprised of the Yamawaki branch of the school. 2. The text of Kyogenki and the Okura style were used if needed in Maze-kyogen. 3. Moreover, I pointed out that there was original production of Maze-kyogen. 4. I pointed out that kyogen survived the present age by having been handed down in Ise.

研究分野：人文学 文学　日本文学

キーワード：狂言　馬瀬狂言　和泉流狂言

１．研究開始当初の背景

（１）これまでの狂言史研究とその問題点

これまでの狂言史研究（特に江戸時代以降）においては、幕府の式楽として位置づけられた中央の流派（大蔵・和泉・鷺）の狂言の変遷を中心に行われてきた。これは、台本類や上演記録などの関連資料が豊富であり、現在も鷺流以外の流派は存続していることが一因となろう。

一方、それとは別に、民間で演じ続けられてきた能・狂言の活動も確認されている。それらは、①五座に所属せずに各地を巡業して演じ続けられたもの（辻能）、②祭礼以外のある特定の場で演じられたもの（遊女能等）、③ある地域で伝承され、祭礼などで演じられたものに分けられよう。こうした芸の実態や伝承のあり方は、中央の流派と異なるところを有するものと予想される。

中でも③の地域で伝承された狂言については、明治期に廃絶した鷺流は別として、関係資料の報告を主とする研究が多く、また中央の流派の崩れという認識で活用されることも少なく、総合的に研究される機会を得なかった。しかし、江戸後期以降明治期にかけて、能狂言から派生した新たな芸能（照葉狂言・今様能狂言・吾妻能狂言等）が興ったことは、民間に広く能狂言が浸透していたことの結果でもあり、その活動の基盤には、こうした地域で演じられた狂言の存在も考えられよう。したがって、これらの狂言の活動の実態を明らかにすることは意義あるものと言えよう。

（２）本研究で中心とする研究対象

本研究では、地域で伝承されたケースとして、三重県伊勢市馬瀬町に伝わる馬瀬狂言（三重県無形文化財）を中心に取り上げ、その芸の伝承のあり方を探ることとする。馬瀬狂言については、すでに 2002～2004 年まで科学研究費補助金（若手研究Ｂ）「馬瀬狂言資料の研究」として取り組み、馬瀬狂言保存会資料の調査・研究を進め、その資料の概要を把握することができた。資料数は約 150 点余りで、その種類は、狂言台本、囃子伝書、小謡集、番組類に分かれ、中でも狂言台本が最も多い。江戸後期から明治・大正期にかけて、書写年代の異なる台本も多く、狂言の変遷を考察する上において好資料と言えよう。

また、馬瀬狂言では、元々大蔵流であったが、天保年間に和泉流の野村玉泉が来勢してから和泉流の狂言が演じられるようになったという伝承がある。こうした中央の流派以外にも、辻能の仙助座とも交流があったことや三味線を囃子に用いた「こんくわい」という独自曲もあり、民間で演じられた狂言との影響関係が認められる。更に、江戸期に出版された狂言台本の『狂言記』４篇（『続狂言記』『狂言記拾遺』等）と関わる台本も存在するなど、様々な形で芸を習得したことが窺え、台本類や上演記録で確認できる狂言の曲数は 200 曲余りとなる。こうした上演曲の豊富さ、また他の芸能との関わりなどの点からも、伝承の実態を探るのに適したものと考える。

前回の科研費での研究では、膨大な資料数ということもあり、上演記録や主要な台本を取り上げた考察はなされたが、資料全体の位置づけや他の狂言資料との比較が不十分であった。本研究では、伝承のあり方にポイントを置き、更に他の地域の狂言のあり方も視野に含め、多角的な視点から馬瀬狂言の変遷の実態を明らかにしたい。

２．研究の目的

（１）地域で伝承された狂言関係の資料を調査・分析することにより、変遷の実態を捉える。

（２）更に、どのようにその芸を習得・伝承してきたのか、その伝承方法のあり方を明らかにする。

（３）他の地域に伝承された狂言との関係性や民間で演じられた辻能や江戸後期から明治期にかけて、能狂言を元にして新しく興った芸能（照葉狂言等）との影響関係についても分析し、式楽としてではなく、民間で伝承された狂言の変遷を明らかにし、狂言史の新たな一面を探る。

３．研究の方法

（１）上記の研究目的（1）（2）を遂行するために、馬瀬狂言資料の台本類、及び上演資料を取り上げ、資料の調査・分析を行う。この馬瀬狂言の伝承のあり方を明らかにするために、下記の３点に着眼し、総合的にまとめることとする。

①馬瀬狂言資料内での上演曲、並びに台本の変遷過程

②芸の習得方法

③伝承活動を支えた背景（演能の場や近在の芸能のあり方から見た伊勢という地域性）

（２）他の地域の狂言資料や新興芸能の資料を収集・分析し、馬瀬狂言との共通性を確認する。

４．研究成果

（１）馬瀬狂言の系統Ｉ
…和泉流山脇派との関係

馬瀬狂言において伝承されている曲の系統について分析・検討し、下記の４つの系統を確認した。

ａ　和泉流山脇派系統
（明和中根本～古典文庫本が中心）

b　『狂言記』系統
c　大蔵流虎寛本系統
d　仙助能系統
これらの系統は、曲の詞章全体が単一の系統と位置づけられるものもあれば、複数の系統の詞章が混在するものもある。中には、大蔵・和泉両流の台本が伝わっている曲もあり、伝承経路が多岐にわたっていたことを示している。

これまで、馬瀬狂言の系統は和泉流と指摘されていたが、その中でも山脇派の詞章が中心であること、またその年代が明和中根本から古典文庫本までの変遷過程の中に位置づけられることが明らかになった。但し、馬瀬狂言資料と和泉流山脇派各台本の詞章と共通する度合いは、曲によってかなり相違があることも認められた。

①「船渡聟」

その一例として、現行の上演曲でもある「船渡聟」について、保存会所蔵資料中で古い年記のある文化八年書写の台本の翻刻、並びに現行曲との比較調査を行い、下記の点を明らかにした。

・文化八年本は、和泉流狂言の山脇派『和泉流秘書』（愛知県立大学図書館蔵）から雲形本へと移行する実態を反映した台本であることが認められた。この他に近い関係にある台本として、明和中根本、古典文庫本、『狂言大全集』（国立国会図書館蔵）などで、山脇派の詞章との共通性が確認できた。
・現行本の詞章は、文化八年本に比して、場面展開の省略化や詞章の簡略化が認められたものの、馬瀬独自の特徴的な詞章は継承されていると認められる。

上記の調査により、現在の馬瀬狂言においても、文化八年本に認められた特徴が伝承されている実態を明らかにした。（この研究成果については、「馬瀬狂言資料の紹介（７）－馬瀬における「船渡聟」の変遷－」として『学苑』867 号で発表した。）

②「枕物狂」

一方、和泉流山脇派の詞章に全く一致する曲も確認された。馬瀬狂言最古本である文化二年本所収曲「枕物狂」である。この曲は、明和中根本「枕物狂」の詞章のみならず、演出を記した注記部分もほぼ一致しており、台本として伝わったものがあったことが推測される。この文化二年本は、他に「末廣」「鞍馬参」「井杭」「鼻取相撲」「木六駄」「因幡堂」「胸突」「煎物」「鴈礫」「三人長者」「三人夫」「佐渡狐」「今神明」「木実論」「三人片輪」「飛越」「比丘貞」の 18 曲が所収され、多くが和泉流山脇派系統の詞章に共通しているが、「枕物狂」のように、曲全体が明和中根本の詞章に一致するといった曲はない。このため、文化二年本自体が明和中根本を書写したものではないことが明らかである。

従って、この「枕物狂」は何らかの形で明和中根本の詞章が伝わり、それが台本として書き留められたと考えられ、馬瀬において、江戸中期の和泉流の台本を入手できる経路があった可能性が指摘できよう（なお、馬瀬狂言における「枕物狂」の台本は本資料のみであるので、伝承の実態は不明ながら、馬瀬での上演は確認されている）。

（２）馬瀬狂言の系統Ⅱ
…『狂言記』の活用

①「花子」

和泉流の詞章と共に、『狂言記』の詞章の混在が認められる曲が確認された。「花子」である。馬瀬狂言に伝わる「花子」の台本は二種あり、両本ともほぼ共通した詞章である。いずれの資料も書写した人物が幕末から明治・大正期にかけて馬瀬で活動した人物であり、その時期に上演された資料と考えられる。この内容は下記の通りである。
・曲の前半は和泉流山脇派（主に古典文庫本に近似）の詞章を用いながらも展開を簡略化し、一部に『狂言記』の詞章を用いる。
・シテが花子との一夜を語る後半部分は、ほぼ『狂言記』の詞章を活用した構成で、キリの場面の追込に馬瀬独自の演出が認められる。

上記のように、曲の途中に『狂言記』を利用する例としては、馬瀬独自曲の「こんくわい」も同様の手法で、曲を構成している。

②『狂言記』活用の背景

本資料は「こんくわい」同様に、『狂言記』の詞章を活用した明らかな事例であり、貴重な資料と位置づけられる。

『狂言記』の詞章を上演している例としては、黒川能の「柿売」が知られているが、馬瀬狂言においても、同様に上演資料として活用している実態が認められた。

こうした活用がなされた背景として、この「花子」においては、曲の簡略化に伴い、要求される演技の難易度を下げ、更に上演時間の短縮を図った可能性を指摘した。より高度な芸が求められる見せ場に、どの流派の台本よりも簡略化された『狂言記』を活用することで、上演しやすい形にしたものと考えられる。この簡略化の傾向は、馬瀬の現行曲にも認められるところである。

また『狂言記』を用いて曲を再構成するということは、それをなし得る力量があったということにもなろう。『狂言記』の享受史においても、馬瀬狂言の事例は重要なものと考える。（この研究成果については、「馬瀬狂言資料の紹介（８）－「花子」について－」として『学苑』891 号で発表し

た。）

（３）特徴的な演出

①馬瀬狂言の曲の中には、通常演じられる追い込みの型に、独自の演出が加わった例を指摘できる。具体的には、「やるまいぞ」と追い込む途中で、「先ず待て」と追い込む相手の所作を止め、更に相手をからかう台詞を述べてから逃げるといった演出である。
②こうした演出は、馬瀬の「瓜盗人」「清水」などの現行曲４曲に認められ、更に前述の「花子」等、現行曲以外の古台本にも確認できる。この追い込みを途中で止める型は、和泉流の演出、中でも古典文庫本に特に多く認められる。（具体例としては、「石神」「因幡堂」「清水」等）。馬瀬狂言資料の中には、古典文庫本と近い関係の曲も多いことから、その時期の演出を摂取したものと考えられる。
③但し、古典文庫本の演出と同じものではなく、馬瀬の演出はより追いかける相手に対して、嘲笑する要素が強い。中央の流派の演出を参考にしながらも、独自の演出を加味したものと推測される。
④こうした独自の演出を行ってきた背景として、「こんくわい」や「長久楽」といった馬瀬独自曲が伝承されていることから、中央の流派とは異なる馬瀬狂言の独自性を示す傾向が考えられる。中央の流派では余り上演されない「琵琶聟」や「蜂」などの曲を上演する事例も、同様の傾向を示すものと言えよう。但し、「琵琶聟」は仙助座からの伝授曲であり、馬瀬独自の工夫だけでなく、こうした辻能の一座の上演を参考にした可能性も推測される。

（４）伝承過程における簡略化

馬瀬狂言の詞章は、先述の通り、和泉流山脇派や他の系統の詞章を用いながらも、中央の流派の詞章そのままという形ではなく、多くの曲で簡略化の傾向が指摘できる。先の「船渡聟」をはじめとして、現行曲においては、その傾向がより顕著であることが判明した。

（５）馬瀬狂言の伝承のあり方

現在の馬瀬狂言において、どのように狂言が伝承されているのか、保存会会員 11 名に対してのアンケート調査、並びに昭和期の活動に携わっていた古老の聞き取り調査を実施し、活動状況や伝承方法を明らかにした。主な内容は下記の通りである。

①稽古の期間
・現在の会員において、狂言を始めた年齢は平均 31.5 歳で、比較的遅い（9、10 歳から狂言を始めたとする人の割合は２割）。入会のきっかけが、狂言保存会の会員の勧誘によって、保存会に加わったまたは馬瀬町の一員として入会したと回答が９割を占め、地域のコミュニティの中で狂言が継承されていることがわかる結果となった。明治・大正期には、馬瀬の農家の長男が狂言を演ずることが義務づけられていたとされ、馬瀬狂言では、成人になってから稽古を開始する形が一般的であった。
・稽古の期間は、昭和期では農作業の終わる 11 月末～２月の祭礼時まで毎日の稽古であった。現在は３月～10 月の能楽まつりの時期まで毎週土曜（２～３時間）に行われている。
②稽古の方法
・芸の伝承は昭和期では舞や囃子などそれぞれの芸（冠者物や舞・謡が中心となる曲など）を得意とする師匠から芸が伝授された。師匠連は多い時で、10 数名。最初は台詞の言い回しを習いその後、所作、そして立ち稽古が行われた。
・台詞は本来口伝で、その後、習ったものを自分の手控えとして記録した。
・演目・配役について、昭和期は師匠が得意な曲柄をふまえ決めていた。現在は、会長が演目を提案し、配役はくじ引きで決め、その後調整する形となった。
・初心者が演ずる曲なども決まっていた。
③上演の場
・馬瀬神社の例大祭以外にも、伊勢市内の商家での上演や、全国の芸能大会などでの出演もあった。

上記の調査から、馬瀬狂言の芸の伝承方法は、元々得意とする芸を専業化し、それを次の世代に引き継ぐ形であったと考えられる。しかし、会員の減少に伴い、また師匠がいなくなった現在では、どの曲でも上演できるように稽古する形へ変化している。但し、囃子については一人一役を習うなど、人数がいない中でも伝承できるように工夫している。

また今後の課題として、どの地域の民俗芸能でも共通に指摘される、後継者の育成が急務と回答されていた。

④伝承を支える伊勢という空間
・こうした芸の伝承を支えているのは、伝統芸能を残してきた先人への尊敬の念と、それを守っていきたいという、会員の意識である。この伝統文化に対する意識の高さは、古来より伊勢神宮に奉仕する地域で伝承されていることも、大きな要因の一つとして考えられる。
・馬瀬独自曲の「こんくわい」は、この遷宮のお木曳きの折に上演されるものであり、こうした公的な上演の場があることで、より芸を磨く契機となったと考え

られる。
・「こんくわい」は残念ながら現在では上演できなくなったが、平成 25 年の伊勢神宮の遷宮の折には、狂言保存会の会員の多くが、お白石持ち行事の様々な役割の中心的な存在として活動していたことを確認した。伊勢市内には、他に一色能、通り能といった、隣接地域での能楽の伝承が確認できるが、これらもまた馬瀬同様に伊勢神宮に奉仕している地域である。
伝統芸能である能・狂言を継承していくという意識が育まれやすい環境として、伊勢という地域があったことが指摘できよう。

（６）本研究の意義と今後の展望

本研究においては、地方に伝承された狂言の変遷の実態を探ることで、芸の伝承のあり方を明らかにした。これまで未翻刻であった資料の公開・位置づけに加え、従来の地方狂言の調査では明らかにしえなかった下記の点について、指摘できたことは大きい。
・詳細な系統の把握
・狂言詞章の具体的な変遷過程
・『狂言記』の受容・活用の実態
・芸の伝承方法
・活動の場としての伊勢の意義
今後の課題としては、研究目的（3）の他の地域に伝承された狂言資料との関係性（中央の流派には認められない独自演出の傾向等）や新興芸能との影響関係に関する研究成果が十分とは言えず、更に追究していく必要がある。また『狂言記』の活用については、今後も同様の事例を探し出し、『狂言記』受容の実態を総合的に明らかにすべきであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①<u>山本晶子</u>、馬瀬狂言資料の紹介（８）－「花子」について－、『学苑』、査読有、891 号、2015、pp.51－69

②<u>山本晶子</u>、馬瀬狂言資料の紹介（７）－馬瀬における「船渡聟」の変遷－、『学苑』、査読有、867 号、2013、pp.44－62

〔その他〕
ホームページ（計５件）
①<u>山本晶子</u>「馬瀬狂言の舞台裏２」（2014 年 11 月 25 日　昭和女子大学人間文化学部日本語日本文学科）
http://content.swu.ac.jp/nichibun-blog/2014/11/25

②<u>山本晶子</u>「馬瀬狂言の舞台裏」（2014 年 11 月 14 日　昭和女子大学人間文化学部日本語日本文学科）
http://content.swu.ac.jp/nichibun-blog/2014/11/14

③<u>山本晶子</u>「お白石持ち行事に参加しました №2」（2013 年 11 月 21 日　昭和女子大学人間文化学部日本語日本文学科）
http://content.swu.ac.jp/nichibun-blog/2013/11/21

④<u>山本晶子</u>「お白石持ち行事に参加しました №1」（2012 年 11 月 20 日　昭和女子大学人間文化学部日本語日本文学科）
http://content.swu.ac.jp/nichibun-blog/2013/11/20

⑤<u>山本晶子</u>「せんぐう館での馬瀬狂言」（2012 年 06 月 02 日　昭和女子大学人間文化学部日本語日本文学科）
http://content.swu.ac.jp/nichibun-blog/2012/06/02

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　晶子（YAMAMOTO　AKIKO）
昭和女子大学・人間文化学部・教授
研究者番号：９０２４５８７９

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし